

「ポイントblank～標的にされた男～」

★★★★

2014（平成26）年12月13日鑑賞
シネ・リーブル梅田>

監督：チャン・カムドク

ペク・ヨフン（元傭兵）／リュ・スンリョン

イ・テジュン（ヨフンの担当医師）／イ・ジヌク

ソン・ギチョル（広域捜査隊班長）／ユ・ジュンサン

チョン・ヨンジュ（中部署の女刑事）／キム・ソンリョン

チョン・ヒジュ（テジュンの身重の妻）／チョ・ヨジョン

ソンフン（知的障害のあるヨフンの弟）／チン・グ

パク・スジン（ヨンジュの同僚の女刑事）／チョ・ウンジ

2014年・韓国映画・102分

配給／CJ Entertainment Japan

<フランスの名作サスペンスが韓国版でリメイク！>

そりゃ、自分の作品が他国でリメイクされて上映されれば誰でも嬉しいはず。しかし、『この愛のために撃て』（10年）（『シネマルーム27』23頁参照）を韓国でリメイクした本作を、「オリジナルよりもすばらしい脚色！すごく興奮した」と絶賛したというフレッド・カヴァイエ監督の発言は本心？それとも、フランス人特有の外交辞令？

『この愛のために撃て』も最初の「つかみ」と、その後の追跡劇がポイントだったが、それは本作も同じ。もっとも、冒頭の暗いスクリーン上で展開される、逃げる男ペク・ヨフン（リュ・スンリョン）が車に轢かれて倒れ、病院に搬送され、その急患の治療にあたった医師イ・テジュン（イ・ジヌク）がちょっとベッドを離れた途端に、怪しげな男によってヨフンの命綱が切断されるというストーリーはフランス版とほぼ同じだが、フランス版と同じくそのストーリーは掴みにくい。それがフランス版の良さでもあったのだから、韓国版もその良さを踏襲したわけだが、私の目には医師テジュンのマスクの甘さがどうもイマイチ……。

さらに当初、この事件の担当となりながら、後に広域捜査隊に担当を移されてしまった中部警察署の女性警官チョン・ヨンジュ（キム・ソンリョン）の美貌は買うものの、ストーリー展開における役割の低さがイマイチ……。さらに、ヨンジュと行動を共にする女刑事パク・スジン（チョ・ウンジ）も美人度はほどほどだが、ちょっと中途半端な役割に……。

<韓国の広域捜査隊の腐敗ぶりVSパリ警察、周永康？>

『この愛のために撃て』では、ひと通りのストーリーが展開し終わった後の、パリ警察の構造的・組織的な、あっと驚く「腐敗」がポイントだったが、本作でもそれは同じだ。中国において、9人で構成する中国共産党の常務委員（現在は7名に変更）の1人であった周永康が、去る12月5日に中国共産党中央政治局の会議で党籍を剥奪され、逮捕されたことには驚いたが、習近平体制が主導する「反腐敗運動」によって摘発された彼の横領額は1兆7000億円、そして愛人は27人というからすごい。しかし、本作に見る、韓国警察の広域捜査隊の「腐敗」ぶりもすごい。

韓国の広域捜査隊なる組織がいかなる権限を持っているのかは弁護士の私でもわからないが、広域捜査隊班長のソン・ギチョル（ユ・ジュンサン）は、検挙率100%を誇っており、そして、担当した事件は一つの間違ひも犯さず完璧に処理することで定評があるらしい。しかし、『レオン』（94年）におけるスタンスフィールド刑事（ゲイリー・オールドマン）を見ても、『トレーニングデイ』（01年）（『シネマルーム1』14頁参照）におけるデンゼル・ワシントンが主演したアロンゾ刑事を見ても、悪徳刑事はどこにでもいる。

周永康は、中国共産党常務委員として、①公（公安＝警察）、②検（検察）、③法（法院＝裁判所）を束ねる「政法部門」の責任者だったから、何でも思うがまま。しかし、本作のギチョルの場合はそこまでの権限はないはずだが、韓国ではひょっとして、「大統領と直結」なんてことも……？まさかそんなことはないと思うのだが、ギチョルの自信満々の態度や、平気で部下を怒鳴り散らし、使い捨てるやり方を見ていると、ひょっとして……。

ちなみに、本作ラストは何とも意外な結末になるが、そこに見る検事とのやりとりでは、いかにもギチョルが大統領と直結しているかのようなセリフが流れるから、そのセリフと、あっと驚く結末に注目！

<元「傭兵」って、こんなに強い？>

本作でギチョルから殺人事件の容疑者に仕立てられ、すべての標的にされてしまう男が、リュ・スンリョン演ずるヨフン。リュ・スンリョンの出演作は多い。私は、『7番房の奇跡』（13年）は観ていないが、①『シークレット』（09年）では、悪名高き組織のボス役として（『シネマルーム25』56頁参照）、②『高地戦』（11年）では、朝鮮戦争で韓国軍を苦しめる人民軍隊長役で（『シネマルーム29』130頁参照）、③『王になった男』（12年）では、入れ替えとなっている王の秘密を知る都承旨役で（『シネマルーム30』89頁参照）、それぞれ大きな存在感を示していた。

リュ・スンリョンはイ・ジヌクのようなイケメンではないから、さまざまなパターンの強烈なキャラを持った役が可能。きっと、そんな評価によって本作で主役に抜擢されたうえ、とんでもない強さを発揮する元「傭兵」というキャラが与えられたのだろう。病院のベッドの上で意識を失いつつ眠っている状態で、命綱のパイプを切り取られたらそのまま死んでしまってもおかしくないが、いったん意識を回復するや、病院からの手際の良い脱出はさすが元「傭兵」だ。だけど、少なくとも彼の身体の中には銃弾がぶち込まれ、その摘出手術を受けた直後ではなかったの……？

11月10日に名優・高倉健が亡くなったが、ケンさんの美学はあくまで単身で、しかもドス一本で切り込むところだった。それと同じように、いやそれ以上に、ヨフンのケンカ美学は、単身はもちろん、武器を持たず己の格闘能力のみを信じて乗り込むところ。元「傭兵」だから格闘能力が優れているのはわかるが、本作ではその能力のすごさに注目！

<身重の妻と元「傭兵」の弟が物語のポイントに！>

本作にみる本来のテジュンは、ノー天気で愛妻家のお医者さん。冒頭の、身重の妻チョン・ヒジュ（チョ・ヨジョン）を気遣いながらも、しっかりエッチもしている仲の良い夫婦生活を見ていると、うらやましい限りだ。彼ら夫婦にはおおよそ殺人事件など縁もゆかりもないはずだから、突然何者かに襲撃され、暴力的にヒジュが拉致されてしまったことにテジュンはビックリ。何者かの電話で、そんなテジュンに与えられた「任務」が、ベッドの上に寝ているヨフンを病院から連れ出すことだ。テジュンにとって、いくら妻を救い出すためとはいえ、担当の患者をワケのわからない奴に盲目的に引き渡すのは、医師としての自殺行為。さて、テジュンは公（＝医師としての義務）を貫徹するの？それとも私（＝患者を捨てて妻を救う）を優先するの？本来ならまずそこで悩むところだが、意外にもそこでのテジュンの決断は早い。すなわち、すぐに後者の選択をしたうえ、警察の追及まで振り切ってしまう素人なりの精一杯のアクションを見せるから、アレレ……。

他方、本作中盤からは、後にヨフンの弟であることがわかる知的障害を持つ男ソンフン（チン・グ）が登場し、ギチョルによってさんざん利用された拳句、いたがられるシーンが登場する。もちろん、これはギチョルがお楽しみのためにやっているのではなく、ヨフンを殺人事件の容疑者に仕立て上げ、広域捜査隊の権益と自分の地位を守り抜くための方策だが、そのやり口はいかにも汚い。ヨフンとテジュンの「連合軍」が到着する中、何とかヒジュだけは脱出できたが、既にギチョルによってボコボコにされたソンフンは息も絶え絶えに。その結果……。

<トコトン極めた、この悪徳ぶりに注目！>

パンフレットには、「『リターン・トゥ・ベース』など頼れる男のイメージが強いユ・ジュンサンが一転、初の悪役に挑戦」と書かれているが、『黒く濁る村』（10年）で私が観たジュンサンは、「検事にあるまじき言葉で追及するパク・ミヌク検事役を演じていた」（『シネマルーム25』59頁参照）から、ある意味、それが本作にみる悪徳刑事ギチョル役の下敷きになっている。そう思うってしまうほど、ジュンサンの本作での悪徳ぶりは板についている。

シリアスな犯罪モノの韓国映画に登場する刑事は、どの映画を観ても強引な捜査と大きな声が特徴だが、悪徳刑事のトップともいべきギチョルはそれがとりわけ顕著だ。そのうえ、役に立たないとみると、部下でも平気で殺してしまうから、そのワルぶりは徹底している。本作のクライマックスは、そんなギチョルが陣取っている警察署に、ヨフンが単身しかも武器も持たないまま車で突っ込んでいくというものだから無茶苦茶だ。もっとも、その卓抜した格闘能力によって、ヨフンはギチョルとの2人の対決までもち込んだが、ギチョルの手には強烈なショットガンが……。本作では、そんな2人の最終対決のド迫力をしっかり確認したい。

201

4（平成26）年12月17日記